

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	根本 隆章
主論文の題目 および 掲載・審査委員名	題 目 Factors Predicting the Cause and Prognosis of Central Line-associated Bloodstream Infections. （中心静脈カテーテル関連血流感染症における原因菌と予後予測因子に関する検討）
	掲載誌 Journal of Infection and Chemotherapy 2015; 21: 118-122
	主査 田中 逸 副査 竹村 弘 副査 峯下 昌道
[論文の要旨・価値] 中心静脈内のカテーテル留置は圧モニタリング、高濃度の栄養液や薬液の注入など高度な医療が可能な反面、重篤な感染症のリスクも伴っている。申請者は 2010 年 4 月から 2013 年 3 月までの 36 か月間に聖マリアンナ医科大学病院に入院した症例から中心静脈カテーテルの先端培養から感染源である可能性が疑われた 1689 例を抽出し、カテーテルの先端培養と同日の血液培養で同定された菌種が一致した場合を中心静脈ライン関連血流感染（Central line-associated blood stream infection: CLABSI）と定義し、得られた 183 件の CLABSI の原因菌と各種臨床因子、予後との関係を後ろ向きに検討した。原因菌は 60%が G(+)菌、23%が G(-)菌、19%が真菌で、具体的菌種は G(+)菌群では <i>Staphylococcus</i> 属（MSSA、MRSA、<i>S. epidermidis</i>）、G(-)菌群では <i>Klebsiella pneumoniae</i> と <i>Pseudomonas aeruginosa</i>、真菌群では <i>Candida</i> 属（<i>C. albicans</i>）が大半を占めていた。G(+)菌群に比して、G(-)菌群は尿や喀痰、便などにおける G(-)菌の保菌例、術後例の割合が有意に高率、同様に真菌群の特徴は真菌の保菌例、高カロリー輸液施行例、広域抗菌薬投与例、術後例の割合が有意に高率であった。さらに培養提出後 1 か月以内の死亡群（27 例）と生存群（156 例）の比較では、死亡群ではカテーテル刺入部に炎症所見を有する例が有意に高率であった（OR=3.14, p=0.04）。本論文は CLABSI を呈した例における原因菌別の臨床的特徴、予後予測因子を明らかにしたもので、感染症予防・阻止のさらなる強化を目指す上で有用な情報を提供しており、学位論文として価値あるものと考えられた。	
[審査概要] 審査は平成 27 年 2 月 25 日に主査、副査の他に松田教授他 2 名の陪席者のもとで行われた。PC による 20 分間の発表後に 30 分間の質疑応答がなされた。複数カテーテル挿入例や複数菌種検出例の取り扱い、contamination の判断基準、術後例では術前の予防的抗菌薬の種類との関連性、死亡例は感染症による死亡と判断してよいか、などの質問に対して申請者は真摯な態度でおおむね的確な回答を行った。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 本研究の着想、計画、診療録の調査、解析はすべて申請者自身が行い、高い研究能力を有していることがうかがわれた。英語能力については参考論文の New England J Medicine の一部を和訳させ、十分な英語読解能力を有していることを確認した。以上から申請者は学位授与に値すると判断した。	